NO.77.2003.9.30.

聞くのはつらい…。でも、彼女の話は、聞かないわけにはいかない。

アレクシエーヴィチさん講演会 迫る!!

ついに、「スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチさんの日本縦断講演会」が目前に迫ってきました。（次ページ参照）

彼女は、チェルノブイリ原発事故の被災者の声を**『チェルノブイリの祈り』**という本にまとめました。事故が起きたとき、人々はどうしていたのか、事故によって生活はどう変わったのか、事故をどう考えていたのか…。それぞれの思いをそれぞれの立場から語る証言は、とても生々しく、読む者の胸に迫ってきます。

また、**『アフガン帰還兵の証言』**では、「明るい社会主義社会を建設するため」に送りこまれたふつうの若者が、戦場という異常な場で自分がしたこと、見たことを赤裸々に語っています。**『ボタン穴から見た戦争』**には、第2次世界大戦時、ドイツ軍に侵攻された白ロシア（現ベラルーシ）の子どもたちの、目を覆うような目撃証言がまとめられています。どれもが、闇に消え去ろうとしている「生の声」を丁寧に拾った、貴重な証言集です。こうした彼女の活動は、2000年**『ロシア小さき人々の記録』**として、NHKスペシャルでも取り上げられ、大きな反響を呼びました。

「証言」を集めながら、アレクシエーヴィチさんは何を感じていたのでしょう。何を私たちに伝えたかったのでしょう。

チェルノブイリはもう過去のこと…。日本人の多くはそう思っています。しかし、50 基以上の原発を抱える日本にとって、チェルノブイリは決して過去にはなりません。**チェルノブイリは、原発反対・推進といった枠組みを越えて、原子力の恩恵に預かる現代人が、忘れてはならない問題です。**

どうぞ、アレクシエーヴィチさんの声に耳を傾けてください。

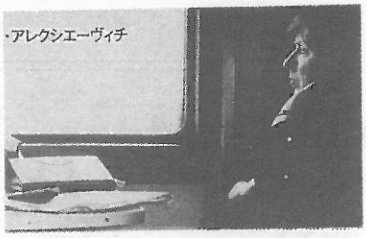
〒466−0822　名古屋市昭和区楽園町１３７　１−１０
チェルノブイリ救援・中部　　代表：田中良明
郵便振替：00880−7−108610
TEL/FAX：052−836−1073（月・水・金　10:00〜17:00）
E−mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

アレクシエーヴィチさん講演会 最終案内

見落とされた歴史について

～自分自身へのインタビュー～

（『チェルノブイリの祈り』からの抜粋）



私の関心をひいたのは事故そのものじゃありません。あの夜、原発でなにが起き、だれが悪くて、どんな決定がくだされ、悪魔の穴のうえに石棺を築くために何トンの砂とコンクリートが必要だったかということじゃない。**この未知なるもの、謎にふれた人々がどんな気持ちでいたか、何を感じていたかということです。**チェルノブイリは私たちが解き明かさねばならない謎です。もしかしたら、21 世紀への課題、21 世紀への挑戦なのかもしれません。人は、あそこで自分自身の内になにを知り、なにを見抜き、なにを発見したのでしょうか？　自らの世界観に？　**この本は人々の気持ちを再現したものです。事故の再現ではありません。**

以前、何冊か本を書きましたが、私は他人の苦悩をじっとながめるだけでした。**今度は私自身もみなと同じく目撃者です。**私のくらしは事故の一部なのです。私はここに住んでいる。チェルノブイリの大地、ほとんど世界に知られることのなかった小国ベラルーシに。**ここはもう大地じゃない、チェルノブイリの実験室だ**といまいわれているこの国に。**ベラルーシ人はチェルノブイリ人になった。**チェルノブイリは私たちの住みかになり、私たち国民の運命になったのです。**私はこの本を書かずにはいられませんでした。**

スベトラーナ・アレクシエーヴィチ

大 阪	**10月11日(土)** **14:00～17:00**	アピオ大阪小ホール（中央区森ノ宮） 主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西　TEL0798-44-2614 （振津）
広 島	**10月12日(日)** **13:30～16:00**	アステール・プラザ大会議室B（中区） 主催：原発はごめんだヒロシマの会　TEL082-922-4850
北海道	**10月14日(火)** **18:30～**	共和町センターホール 主催：北海道平和運動フォーラム他　TEL011-231-4157
長 野	**10月15日(水)** **18:30～**	松本市あがたの森文化会館 主催：日本チェルノブイリ連帯基金　TEL0263-46-4218 ゲスト：神田香織さん（講談師）
長 野	**10月16日(木)** **18:30～20:30**	富県ふるさと館（伊那市） 主催：伊那谷いのちがだいじ連絡会　TEL0265-73-6103 （小牧）
愛 知	**10月18日(土)** **13:30～16:00**	今池ガスビルホール（名古屋市千種区） 主催：チェルノブイリ救援・中部 他　TEL052-836-1073
東 京	**10月19日(日)** **13:30～16:30**	カタログハウス・セミナーホール（渋谷区代々木） 主催：東京講演実行委員会　TEL03-5365-3113 （カタログハウスの学校）

ウクライナに行ってきます (^o^)／

〈移住者の村（サトキ村）の診療所にて
（2003年2月14日）〉

10月29日（水）から11月7日（金）までの10日間、神野美知江さんと二人でウクライナに行きます。今回は、名古屋空港発着でフランクフルト経由です。ジトーミル州現地には、5日間滞在します。

【今回の訪問の主な目的】

1） チェル救の状況と今後の支援活動についての説明と話し合い

前号（76号7ページ）の「転換期のチェル救／今後の活動の方向」にあるように、チェル救の活動は大きな転換点に来ています。その点について、現地諸団体によく説明し、理解を得たいと思います。また、今後の新規事業は、現地の団体が直接日本外務省から資金を供与されて事業を行うという方式が中心になります。チェル救は、コーディネーターとして事業の企画・申請・進行管理などに関わりますが、現地団体の企画力・管理能力が要求されることになります。これらの点についてもよく説明したいと思います。

説明の仕方も、これまでのように各団体との個別協議のなかで行うのではなく、各団体に一堂に会していただいて、そこで説明することにしようと考えています。

2） 進行中の大型事業の視察と協議

現在、外務省資金を利用する「移住者村診療所基盤整備事業」と、自己資金による事故処理作業者のための「サナトリウム利用事業」（6ページ参照）が進行中です。前者については、まもなくこの事業の実施主体であるホステージ基金から、正式の申請書がキエフの日本大使館に提出されます。後者については、契約書作成の最終段階に入っています。これらの事業について視察と協議を行ってきます。

3） 来年度以降の大型事業についての下調べ

現在進行中の「移住者村診療所基盤整備事業」が、単年度の事業になるのか、2年間にわたる事業になるのか、まだはっきりしていませんが、いずれにしてもそのつぎの大型事業についての下調べを可能な範囲でしてきます。

4） 現地諸団体との話し合い

被災者団体等、チェル救が関係をもっている現地の団体と話し合いをします。

5） 支援先の病院の訪問

今回は、医薬品を支援しているナロジチ病院とブルシロフ病院を訪問する予定です。

私にとっては、今年2月に続くウクライナ訪問で、通算6回目になります。この回数の多さからくる慣れと、訪問団の役割がだんだん「業務打ち合わせ」中心になってきたことから、あまり、ワクワクした気持ちにはなりませんが、むこうに行かなければ会うことができない人たちに会えることは、やはり楽しみです。11月のウクライナも初めてです。初冬の風物を楽しんできたいと思います。

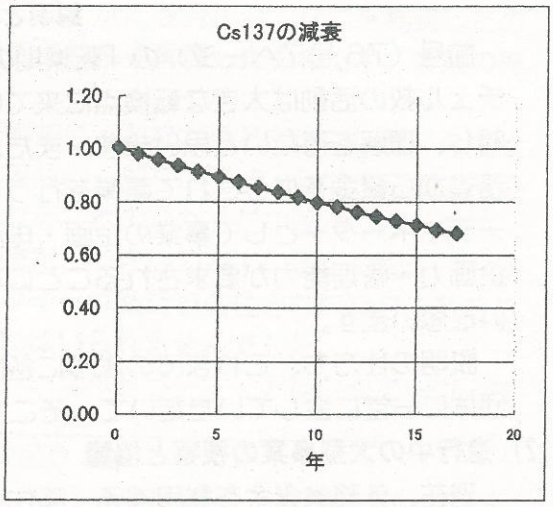
（田中良明）

連載36　チェルノブイリは終わらない

世界を震撼させたチェルノブイリ原発事故から、すでに17年が過ぎた。事故当時は、放射能の恐ろしさに身震いした人々の関心も、今では過去のものになろうとしている。それは日本だけでなく世界中でも、また当事国の旧ソ連でも、チェルノブイリ原発のあるウクライナでも同じだ。事故対策のために作られたウクライナ政府の「チェルノブイリ省」も、今では一般的な「緊急事態省」に吸収・統合された。確かに、世界は大地震や異常気象、戦争、テロなど絶え間なく人々に降りかかる災難で満ち溢れている。人々の関心も時々刻々の事件に奪われ、全てが速やかに過去のものになる。しかし、被災地の人々にとって、チェルノブイリの放射能は今も17年前の続きである。なぜなら、放射能が依然としてそこにありつづけるからだ。

放出された放射能

1986年4月26日深夜に始まったチェルノブイリ原発の爆発と、それに続く10日間の火災で放出された放射能の総量の正確な数字は、今なお分からない。最近のOECD（経済協力開発機構）の発表によれば、キセノンなどの希ガス放射能は100%が、ヨウ素131は60%、セシウム137は50～60%程度が環境中にばら撒かれた、とされている。事故直後の被曝の多くは、希ガスやヨウ素など半減期の短いものによるが、時間がたつにつれて、セシウム137やストロンチウム90など、半減期が30年を超える長いものによる被曝が、大きな問題となっている。セシウム137に限れば、放出量は8.5×10^{12}ベクレルと推定されている。天文学的な数字である。半減期が30年のこの放射能は、いまなお土壌を汚染し、森や畑の植物を汚染しつづけ、それを食べる動物や家畜、人間を被曝し続けている。右のグラフは、セシウム（Cs）137の事故直後からの減衰の様子を計算したものである。爆発から17年を過ぎてもなお、68%の放射能が残留している。単純に計算すれば、300年経ってやっと1000分の1になる。それでも閉鎖ゾーンと呼ばれる高度汚染地域には人が住めない汚染である。放射能が残る限り被曝も続く。



循環し続ける放射能

放射能の寿命を人工的に短くすることは出来ない。実験室で加速器といわれる装置を使えば別だが、膨大な環境の放射能の処理は不可能である。自然のままに半減期に従って崩壊し減少するのを待つしかないのである。その間、放射能は自然界の中で様々な経路をへて循環する。事故直後の汚染した植物の葉は今、腐葉土となって地面の中で水溶性になり、養分と共にその放射能がキノコや山菜、樹木に吸い上げられ、新たな汚染が始まっている。ナロジチなどの住民の体内放射能は、今でも日本人の1万倍以上ある。キノコや木苺の放射能は今でもほとんどが基準を超えている。人々は昔からそうしてきたように、今もそれを食べて生きている。一方、土壌表面の放射能は雨に洗われ河川に流出する。ウクライナの首都、キエフの人々は汚染したプリピアチ川の下流の水を飲んでいる。その水は最後に黒海に流れ込み、黒海の底泥の放射能はじわじわと上昇を続けている。　（河田）

映画「ヒバクシャ」を見て

湾岸戦争で激しい戦闘があった町…バスラ。ここでは、白血病やガンの子どもが増え続けている。12年間で亡くなった子どもは、80万人とも100万人ともいわれている。

「私を忘れないで…」と1枚の紙切れを残して亡くなった14歳の少女「ラシャ」の無念さが、鎌仲ひとみ監督に映画の制作を決意させたという。

湾岸戦争で大量に使用された劣化ウラン弾。そして、その後放置されたままの戦車は、ボロボロになっているけれど、劣化ウラン弾で汚染されている。汚染された水を、「この水は飲めないのよ」と言いながら飲むしかない子ども達。大人達の強欲が、この子らを死に追いやってしまう。何と情けないことでしょう。

それにしても、どうしてイラクのあの子達は、あんなにもかわいく、お茶目で明るいのだろう。あの笑顔が一層悲しく胸をつきます。

合衆国ワシントン州ハンフォードの、原子炉と核廃棄物貯蔵施設の「風下の住人」の間に、ガンや甲状腺異常が増加していて、住人の多くは亡くなっている。その広大な土地で今、ジャガイモが栽培され、その多くは日本にも入ってきているという。恐ろしいというよりも、どうにもならない絶望感が残る。

一方、広島で被爆して以来58年間、国内の何万人ものヒバクシャを直接診療してきた、肥田舜太郎医師が、微量の放射能がもたらす危険を訴え、さらにヒバクシャの医療と人権の回復に取り組んでおられる姿は、本当に頭が下がる思いです。

この映画を見て、「私達は、これ以上、次世代を担う子ども達を悲しませてはならない。そのためにも、多くの人にこの事実を知らせねば…。」と思いました。　（大谷早苗）

視聴者のアンケート（感想文）より

ヒバクによって、人生が変わってしまった人たちの苦労や辛さを、あらためて知ることができた。アメリカの汚染された土地で栽培されたジャガイモが、日本に輸出されていて、私たちの口に入っていると知りショックです。様々なルートから汚染されていくのだな、と思うと怖くなりました。　（U・N）

一人でも多くの人に観てほしい、気づいてほしい。しかし、今のマスコミの中では知ることができない。イラクへ行く自衛隊員とその家族に見てほしい、知ってほしい。そのためには、私がことばにして、まわりに伝えることしかない。　（S・I）

イラクの人々の生活の現状を知って、胸が苦しくなりました。白血病になっても薬がないために死んでいく子どもがたくさんいること、それはアメリカの経済制裁のせいだということを知って、アメリカ政府や日本政府・国連などに対して怒りを覚えるとともに、そのことを知らなかった自分を恥ずかしく思いました。　（T・T　大学生）

「チェルノブイリの消防士たち」支援プロジェクト

～事故処理作業者とその子ども達の
ジトーミル民間医療センターにおける、治療・健康増進のための保養計画～

この支援プロジェクトは、現地の実情を聞き、あるいは調査して、日本側からプロジェクトを提案実行するという従来のパターンから一歩進んで、現地の被災者団体から計画が提案され、ウクライナ・日本双方の話し合いのもと、実現される運びとなったものです。私達が常に望んでいる、現地からの"自立的な"支援プロジェクトと言えるものです。以下は、「チェルノブイリの消防士たち」代表チュマク氏からの提案です。

チェルノブイリの悲劇の日から、17年が過ぎ去りました。

あの日、地上の生命を救うための闘いに、最初に突入していったのは、消防士たちで、多くはすでに亡くなっています。放射線被曝は、今もその悪影響を与え続けているのです。

近年、原発事故処理作業に参加した消防士たちの健康状態は、急激に悪化しています。2003年9月20日までに、ジトーミル州の消防局員中31人が亡くなり、うち11人は過去2年間の死亡です。主な死因は、心臓脈管系疾患・麻痺を伴う脳卒中や梗塞、そしてさまざまな器官の腫瘍です。この2年間に、事故処理作業者の障害者は2倍に増え、172人が、心臓脈管系・血液循環・消化器・呼吸器などの重い病気に罹っています。**消防局職員たちは、立ち入り禁止区域や汚染地域での消火作業で、今も被曝しているのです。**

極めて遺憾なことに、ウクライナは困難な経済情勢のため、増大しつつある事故処理作業者の治療の必要性に応えることができません。「チェルノブイリの人質たち」基金、「チェルノブイリの消防士たち」基金、「チェルノブイリ」協会は、健康状態が急激に悪化しつつある事故処理作業者たちに、より有効な支援を行う手だてを研究し、探し求めています。

私たちは、ジトーミル民間療法研究・実践センターと話し合いを始めました。このセンターは、治療施設であり、ウクライナの伝統的療法(薬草療法)、そして東洋諸国の療法が用いられています。胆道ジスキネジー・甲状腺肥大・慢性気管支炎などに罹っている、放射能汚染地域の子どもたちも治療を受けています。**栄養バランスのとれた食事・薬草療法・鍼灸術・水療法などによって、病気の子どもたちの健康を増進することができます。**汚染地域では、身体の浄化・除染ということも緊急の課題です。除染の一連の過程(重金属塩や放射性物質の排出)は、肝臓・リンパ系・消化器・腎臓・細網内皮系の機能を、活性化することによって行われます。

「チェルノブイリの人質たち」基金、「チェルノブイリの消防士たち」基金と州消防局は、この問題を検討し、**センター施設での事故処理作業者と児童の治療計画を提案して、これにセンター所長は同意しました。センターのインフラストラクチュア整備、設備備え付けなどの作業は、消防局職員の労力提供として提案しました。センター所長は、治療費を引き下げ、事故処理作業者と被災児童にのみ割引保養券を提供します。**そして、割引保養券を提供される事故処理作業者は、センターに保養券原価の15%以内の寄付をし、そのお金は被災児童が無料保養を受けるために用いられます。これらすべての点につき、当事者間で合意が得られました。**「チェルノブイリ救援・中部」の支援を得て、5年の間にすべてのジトーミル州内の、消防士の事故処理作業者を保養させることができる**という見積りがなされています。このプロジェクトは、将来も継続する可能性があり、事故処理作業者と児童にとって、大きな支援となるでしょう。

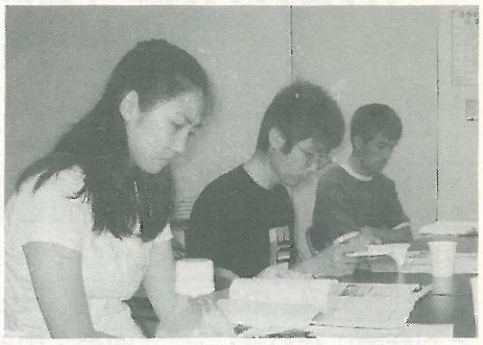
すべての消防士…事故処理作業者たちは、10年にわたって続けられている、何物にも代え難い支援に対し、日本国民の皆さんに深い感謝の意を表明いたします。

慈善基金「チェルノブイリの消防士たち」代表　ボリス・チュマク

2003年9月20日

ウクライナ講座

アレクシエーヴィチ講演会　プレ企画



『ボタン穴から見た戦争
　　ー白ロシアの子ども達の証言』読書会

「頭からかぶったオーバーのボタン穴から爆弾が落ちるのを見ていました。」この本は、第２次世界大戦下、ナチス・ドイツの白ロシア侵攻当時、０歳から14歳の子どもだった人たち101人の証言記録です。（原題は「最後の生き証人」）

前２回の読書会と同様、講座担当者が印象に残った箇所の朗読から始めました。しかし、**「これがまだ年端も行かない子どもの体験か…」と思うと、胸がつまって声に出して読むことが困難なほどでした。**そして、その後に起きた、また、今も続いている世界各地の戦争（侵略・内戦・紛争）に巻き込まれた子ども達の泣き叫ぶ声もが聞こえてくるようです。

今回は田中良明さんから、独ソ戦争についての背景を詳しく教えていただきました。独ソ戦争の犠牲者は、ソ連側だけで2,600万人とも2,800万人とも言われ、**最初から最後まで戦場になったベラルーシでは、なんと人口の4分の1の人命を失ったそうです。**敵味方を問わず、人命を顧慮しない「２つの政治体制（スターリニズムとナチズム）」と「２人の独裁者（スターリンとヒットラー）」間の死闘の結果だということです。

「アフガン帰還兵の証言」「チェルノブイリの祈り」「ボタン穴から見た戦争」（残念ながら翻訳されているのはこの３冊のみ）**と読んできて、アレクシエーヴィチさんの「20世紀の証言者・小さき人々」への思いが少しずつですが、わかった気がしました。**

（橋本京子）

～今年最後のウクライナ講座のご案内～

「アレクシエーヴィチさん講演会を語る」

来る10月18日（土）のアレクシエーヴィチさんの講演会（１P参照）に向けて、ウクライナ講座も講演会に合わせた企画（読書会・朗読会）とし、参加者にお楽しみいただきました。そこで、今年最後の締めくくりは、講演会を終え、皆様と感想を語り合う場とすることにいたしました。「アレクシエーヴィチさんで始まりアレクシエーヴィチさんで終わる」2003年としましょう。

日時：12月6日(土)　午後1時30分～4時（今回は、通常と異なり第１土曜日です）
会場：あいちNPOプラザ(地下鉄市役所下車　２番出口徒歩３分)

カタログハウス㈱「チェルノブイリ母子支援募金」制度
助成金（総額160万円）が交付されました！！

『通販生活』でおなじみの「カタログハウス㈱」さんとは、もう10年来の長いお付き合いですが、ちょっとした勘違いがあって、私たち「救援・中部」は、今まで**「チェルノブイリ母子支援募金」**制度に申請を行ったことがありませんでした。ところが、今年に入り、「アレクシエーヴィチ講演会」の主催者同士として、より交流が深まる中で、『「救援・中部」が、なぜ「母子支援募金」制度に申請をしないのか』ということが話題になりました。「救援・中部」はそれまでも、カタログハウス㈱さんから直接、運営費として多額の支援を受けており、『これ以上お願いするのはあつかましい』と考えていたのです。

勘違いが氷解し、さっそく、申請書の作成にとりかかりました。7月末に申請をし、9月半ばには、お役所の助成金制度ではとても考えられない迅速な審査によって、申請に対して満額の、**160万円の医薬品**の助成金が交付されることになりました。

内訳は、**「ナロジチ病院」へ50万円、「ブルシロフ病院」へ70万円、「チェルノブイリの消防士たち」へ40万円**です。10月の訪問団は、この嬉しいおみやげを手に、各地を訪問することになります。

「カタログハウス㈱」さんのこの助成金は、『通販生活』の読者からの力強いカンパでまかなわれており、「通販の読者の皆さんにとっては、チェルノブイリが決して風化していない」ことを教えてくれた、貴重な助成金となりました。　（市原佳代）

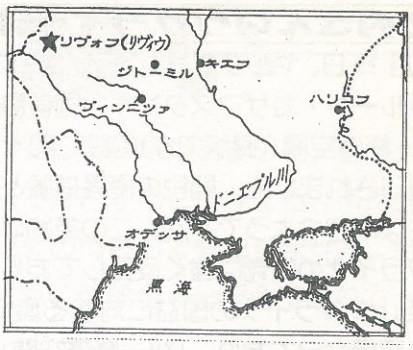
日本キリスト教会改革派春日井教会コンサートでカンパをいただきました

8月31日、愛知県春日井市にある「春日井教会」で、毎年恒例のコンサートがあり、お邪魔させていただきました。パイプオルガンの音色は、残暑を忘れさせる心地よさで、いっときの心のやすらぎが訪れたようでした。

この「日本キリスト教会改革派春日井教会」は、「救援・中部」とはもう長いお付き合いで、私たちの支援に深いご理解をいただいております。この恒例のコンサートでは、チェルノブイリ原発事故の被災者のためのカンパを募ってくださり、出席者の方々から多額のカンパをお寄せいただきました。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。

また今年は、ロビーの一角をお借りして、約1ヵ月後に控えたアレクシエーヴィチさんの講演会のＰＲもさせていただきました。たくさんの方が足を止め、チケットや本を購入してくださいました。
（市原佳代）

竹内さん“リヴォフ(リヴィウ)”に行く



9月6日（土）～7日（日）に、「リヴォフ」（…はロシア語発音。現地で圧倒的に多く使われているウクライナ語の発音では「リヴィウ」）で観光してきました。

過去には、長くポーランドやオーストリアの一部だった西ウクライナの土地で、街のたたずまいは、キエフやジトーミルとはかなり違います。旧市街の道は細く、石畳が多く、路面電車も狭軌で、世界遺産に指定された街の中心部には16世紀・17世紀の建物が連なり、少し歩けば古い教会(カトリック、正教、アルメニア教会など)にぶつかり、観光のためにあるような街です。洗面台、ベッド、机と椅子、ワードローブのある、ホテルの2人部屋（シャワーとトイレが廊下にあり、シャワー使用は3グリヴナ。朝食別）が80グリヴナ。皆様も一度どうぞ。

この町の大学でも日本語が教えられており、現在は日本人の講師がいるそうです。私と、映画マニアである同行のヤロスラフ君は、市内の「金獅子亭」で、北野武のヴェネツィア映画祭銀獅子賞受賞を祝って、リヴォフの地ビール（工場は創業1715年）を飲みました。ただし建物修復のための予算は見るからに不足しており、銀行などおカネのありそうな施設が入っているものを除けば、全体にぼろっとした外観の建物が多いです。それがまた古めかしい（？）雰囲気をかもしだしていると言えなくもないですが。（T）

【来年２月の視察団に参加します！】

みなさん、はじめまして。江成美絵といいます。

私は、京都の『三菱京都病院』で、臨床工学技士として働いています。４年目のまだまだ未熟者です。今回、ふとした縁で（臨床工学技士の北野達也さんを通じてですが…）チェリノブイリ救援・中部を知りました。

私自身が、国際ボランティアに興味もありましたので、技士会などで演題発表している北野さんに、色々お話を聞く機会を設けていただきました。この救援活動の中で、「私の臨床工学技士としての役割は??」と聞かれると、とても困ってしまいます。まだ４年目の未熟者で何ができるか分かりません。しかし、臨床工学技士として「リサイクル機器に現役でがんばってもらうため」に「技術」をめいっぱい駆使したいと思っています。

２月までにもっともっと現場での「技」を身に付けて、臨床工学技士として役に立てるように努力します。また、臨床工学技士の重要性を知ってもらうためにも、がんばりたいと思います。よろしくお願いします！

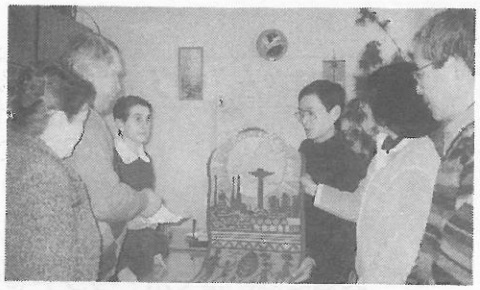
（江成美絵）

竹内さんのウクライナ便り

9月19日、ヤルタで、ウクライナ・ロシア・ベラルーシ・カザフスタン4カ国首脳により「統一経済空間」(直訳です)創設に関する条約が調印されました。関税の優遇措置というのが主な内容のようですが、この条約についてウクライナの野党は強く反発しており、「憲法違反」「ウクライナの国益に対する裏切り」という評価も出ており、「統一経済空間」が機能するためには50ほどの文書を議会で批准しなければならないとあって、その将来が疑問視されています。強権体制を強めているこれら3国との協力関係を新たに結ぶことは、欧米のウクライナへの不信感をつのらせており、ウクライナが加入の意思を表明している欧州連合のEU拡大担当委員、またイギリスの欧州担当相が上記条約の調印前夜相次いでキエフを訪れた際には、人権の尊重、法による支配、言論の自由がNATO及びEUへの加入の前提条件であることが強調されました。3年前の反政府系ジャーナリスト暗殺事件が、大統領その他の関与が強く示唆されながらも迷宮入りしているウクライナは、国際人権保護団体「国境のないレポーターたち」による報道の自由評価リスト(139カ国)中112位を占めている由。独立系の新聞が政府の命令でつい最近も廃刊に追い込まれたベラルーシは124位。カザフスタンは116位、ロシアは121位と、どんぐりの背比べ状態？　です。

全くの余談ですが、「国境のない……」で思い出したウクライナの小噺を書かせていただきます。「『国境のない医師団』の主旨に共鳴し、ウクライナの医師たちが同様の団体をつぎつぎに結成している。『ガソリンのない救急医師団』、『包帯のない外科医団』、『詰め物のない歯科医団』……」というものですが、ウクライナの医療事情を知らないと笑えないでしょうね。まあ、知っていても、苦笑いしかできませんけれども。

前々号で書きました、大統領による憲法改正案は、いったん大統領自身により取り下げられ、新たに登場したその改訂版の眼目は、大統領を選挙で選ぶのでなく、最高会議で選出する、というもの。来年の大統領選挙では、2期を終え憲法の規定により下野するクチマ氏に代わり、元首相で欧米寄り改革派のユシェンコ氏が選出される見込みが大きいため、それを回避し、大統領寄りの中道右派政党連合がかろうじて多数派を占める最高議会で、クチマ氏の息のかかった人物(それが誰になるかは諸説あり)を次期大統領に選ばせる――という筋書きのためにこの憲法改正が持ち出された、というのが、もっぱらの見方です。その後クチマ氏自身は、大統領になる以前に務めたことのある首相の座に返り咲くつもりだ、と主張する野党党首までいます。



<障害者協会のタビノヴァさん達と(2003.02)>

また、2004年度予算案が最高会議に上程され(ウクライナの会計年度は、こよみ上の年度と同じ)、その中で、老齢年金受給年齢に達しても働いている人は年金を支給されない、という規定があったため、野党の大きな反発を招いています。年金だけでは生活できない人が多いばかりでなく、安月給で生活苦の子や孫に自分の年金を分けている老人が少なくないのが周知の事実だからです。年金自体の増額は見込まれているものの、インフレを計算すれば実質的な値上げにはならない程度でしかないことも問題視されています。また、2004年1月1日から、所得税が一律13%になることがすでに最高会議で可決されていますが(ロシアの真似で、ヤミ経済を「明るみに出す」、つまりこれまで脱税していた人たちが納税し始める結果の税収増を期待するもの)、地方自治体の財源が主にこの所得税であるため、当面地方自治体の予算が厳しくなることも予測されています。軍事予算は68億グリヴナですが、うち35億グリヴナは、老朽化した機材や不動産の売却などで自給(?)することになっているそうです。

(9月27日)

寄付（カンパ）のお願い

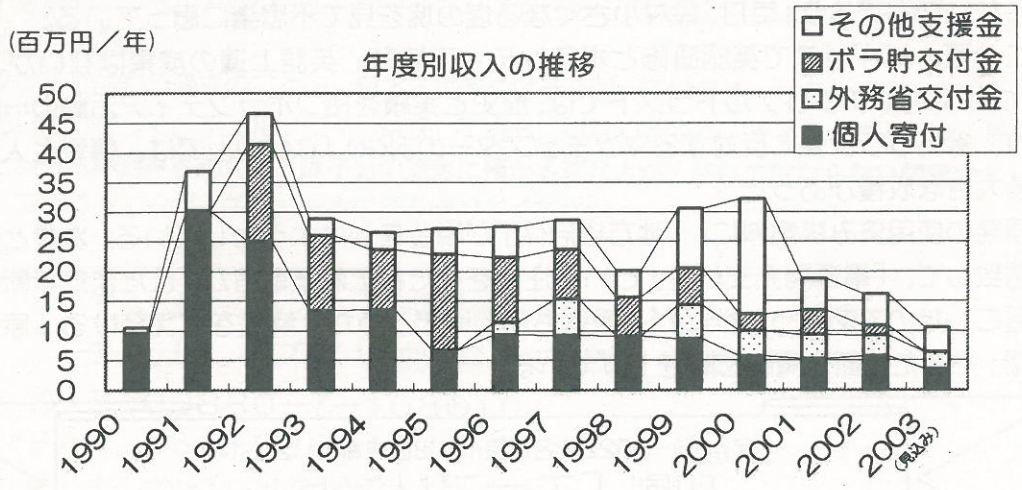
チェル救の支援者の皆様には、これまでに多大な寄付をしていただきました。著名人や特定の機関のバックアップを持たないチェル救が、今まで存続することができ、市民的救援団体として高く評価されているのも、皆様のご支援以外の何ものでもありません。会費制度を設けず、収益事業も行わなくても、個人寄付と公私の助成金・分配金で成り立ってきました。

しかし個人寄付は、1996年度から99年度までは年間900万円台、00年度から02年度までは年間600万円台と減少してきており、03年度は、4月から8月までの累計で210万円と、このままいくと、年間で350万円程度になり、予想をはるかに上回る（下回る？）激減となります。

厳しい経済状況、チェルノブイリ原発事故の記憶の風化、支援者の高齢化など、個人寄付がある程度減少していくことは、やむをえない面があります。なんとか予算を確保するために、各種助成の獲得、支援事業の整理、経費節減などに努めてきましたが、ボラ貯・外務省の交付金が打ち切りとなり、このままでは、1～2年のうちに支援事業の大幅縮小・再編を余儀なくされることは確実です。

チェルノブイリの被災者の方たちは、逃げることのできない体内被曝・後遺症と、永遠の戦いを続けており、いま、私たちが支援の手をゆるめるわけにはいきません。チェル救に今まで以上の活動をさせていただくためにも、改めて寄付の呼びかけをいたします。どうかよろしくお願いいたします。

カンパ支援者の輪を広げましょう！ ポレーシェ読者の輪を広げましょう!!



事務局だより

やっと爽やかな秋到来、と思っても、気分は晴れない。あちこちのプラントの爆発事故、原発の放射能漏れ事故、実らない秋―厳しい冷害、そこに追い討ちをかけるような北海道の地震…次から次へとめまぐるしい。現場・現地の方々の大変さは如何ばかりか。そして、明日は我が身。めまぐるしいといえば、チェル救の秋も、である。

こちらは、活発な活動のなせるワザ、によるのだけれど、手が足りない。10 月はいくつもの事業が重なる。アレクシエーヴィチ氏講演会、研修生受け入れ(期待いっぱい)、秋の代表団派遣事業準備、中古機器発送に向けての手続き、恒例のミルク・キャンペーン(街頭活動を含む)、カード・キャンペーン、現地新規事業の現地団体とのやりとり・進捗状況の把握等など、本当にやりこなせるのかと思う。講演会ひとつとっても、たくさんの人に参加してもらうため、もっと外へ働きかけなければならないのに、手がまわらない。特に講演会はもうすぐだ。研修生達がやってくる。彼らが救いの神なのか?

ともかく「実り」多い秋になるように・・・と願う。 (山盛)

読者の声

合掌(渋谷区　T.T)

ご活動に感謝いたしております。ますます悪い時代になり、辛い人々を生み出します。無関心でいる一人一人が変われば、世界も変えられると思いますが…。(豊明市　K.K)

スヴェトラーナさんのお話を 10 月 19 日に、カタログハウスで聞きます。準備、大変ですね。ごくろうさまです。(町田市　M.S)

編集後記

☆9月30日は“臨界事故”を思いだして、放射能の脅威を噛みしめる日です。彼らの死を無駄にしないように、私達がなすべき事は何かを自分自身に問う日です。 (美)

☆先日引っ越した隣人が、玄関先とベランダに“盛り塩”を残していった。なんのおまじないなんだろう。毎日、段々小さくなる塩の塊を見て不思議に思っている。 (佳)

☆この夏、イギリスで英語研修とボランティア活動。英語上達の成果はないが、NGO「OXFAM」やナショナルトラストでは、歴史と実績を持つボランティア活動の一端を知り、劣化ウラン弾に反対するマンチェスターの NGO「CADU」では、情報と人脈を得る大きな収穫があった。 (京)

☆原発の使用済み核燃料に、「地方自治体」が税金をかけようとしている。次々と原発を誘致して、「電源開発交付金」という注射を打たれた麻薬患者が、またまた禁断症状を起こしたのであろう。欲しがる患者も苦しいだろうが、麻薬を与え続ける「原子力産業」もまた、断末魔の悲鳴を上げている。 (J)

〒456-0022　名古屋市熱田区波寄町　20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX　(052) 871-9473